

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14019

研究課題名（和文）読むことにおける理解の深化に資する対話を核とした教育評価に関する研究

研究課題名（英文）Research on Dialogic Reading Assessment for Deepening Students' Understanding

研究代表者

高瀬 裕人（Takase, Yujin）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：30823083

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、以下のことを明らかにした。

（1）学習者の理解の深化に資するものとするために、理解するための方法と、それを用いて得られた成果や喜びとを関連づけて対話する学習評価が効果的であること。（2）そうした学習評価は、学習者の欠点を探したり、競争を煽ったりするのではなく、称賛的な見方を基盤としたものであること。（3）また、そうした学習評価は、教師と学習者、学習者同士が互いのことを信頼し合うなかで営まれるものであり、信頼を核としたものであること。（4）こうした学習評価を大切にして継続的に行っていくことにより、学習者が自立した学習者へと成長していくことにつながる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

情報が氾濫している現代社会において、主体的に言葉に向き合い、ゆたかに深く思考・判断・表現することが求められている。本研究は、こうした「読むこと」の資質・能力を育成する上で必要な教育評価について検討した。

本検討を通して、継続的な対話的な学習評価を実践していくために必要なもの、またその具体的な道筋を描き出すことができた。本研究で得られた知見は、国語科教育研究で課題とされてきた自立した読者の育成に資する教育評価法を提示した点に学術的意義がある。また本研究で得られた知見は、これからの時代に必要な資質・能力を育み、時代を生き抜く自立した読者の育成することに寄与するという点において社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the following.

(1) In order to deepen student's understanding, it is effective to conduct dialogic reading assessment where teacher and student talk about comprehension strategies were associated with the results and joy of reading obtained by using it. (2) that such reading assessments are based on admiring lens rather than looking for students' faults or encouraging competition. (3) In addition, such reading assessment should be carried out in the context of trust between teacher and students, and among students themselves, and should be based on trust. (4) By valuing and continuously conducting such reading assessment, students would grow into independent learners.

研究分野：教科教育学

キーワード：教育評価 理解 学習のための評価 学習としての評価 対話的評価 称賛する見方 信頼 継続的評価

1. 研究開始当初の背景

これまで読むことの教育において、自立した読者の育成が最大のねがいであることが提案され、そうしたねがいを実現するための学習指導法が開発されてきた。しかし、一方で、わが国の読むことの教育評価法が十分に開発されてきたとはいいがたい現状にある。とりわけ、読書中の思考・判断・表現を確かに見とり、読むことにおける深い学びの実現に資する評価法、そうした読むことの学びを通して得られる充実感や読書中の内的な葛藤を生かし、読書意欲の向上につながる評価法がいまだ十分に開発が進んでいない。また、評価主体も教師に限定されがちで、読むことの教育評価は、いまだ教師から学習者へという「伝達モデル」に依拠したものと捉えがちであり、学習者の教育評価実践への参加が十分に果たされていないのが現状である。

また現代社会は、メディアなどの急速な発展にともない、情報にあふれている。そうした状況において、言葉に主体的に向き合い選択し、解釈したり批評したりしながら再構成し、新たな価値を創造していく力を養う必要がますます重要になってきている。

これらのことを背景として、国語科において、自立した読者の育成に資する効果的な教育評価法の開発が喫緊の課題となっていると考えた。とくに、教師と学習者が共同探究者となり、学習者の成長物語を紡ぎ出していく教育評価、学習者が自らの読書行為を振り返り、次の一歩踏み出すための計画を構想・実践していくのを支える教育評価を開発していく必要があると考えた。

2. 研究の目的

こうした背景を踏まえ、読むことの教育のなかでの教師と学習者、学習者同士の対話に着目し、そこで読書中の思考・判断・表現、あるいは読書意欲や読書にまつわる内的葛藤、さらには読書を通して学習者が得る成果や喜びを対象とした教育評価法の意義を明らかにしていきたい。そこで、本研究は、読むことの教育において、学習者が主体的に理解を深化させていく学びの生成・充実に資する教育評価法を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

上述の研究の目的を達成するために、国内外の文献調査と実践データの分析をもとに本研究を進める。まずは、文献調査を通して、国内外の教育評価ならびに読むことの教育の動向を把握し、それらをもとに本研究の枠組みの構築を目指す。次に、実践データの分析を通して、先の文献調査における検討を通して構築した枠組みをもとに、具体的な評価実践の分析を行う。最後に、文献調査と実践データの分析をもとに見えてきたものをもとに、読むことの教育における対話的評価のモデル化を図る。

4. 研究成果

本研究では、まず米国で展開されている理解方略指導の現状を探った。エリン・オリバー・キーン、ジェニファー・セラヴァロ、マリリン・プライルといった、近年米国において読むことの教育実践に対する積極的な発言が見られる教育実践家らの所論を取り上げ、検討した。これらの検討を通して、大人読者・熟達した読者が用いる理解方略をドリル学習のように教えるのではなく、大人読者・熟達した読者が実際に理解方略を用いる文脈、すなわちほんものを読むことが行われる場を創り出し、そうした場で学習者が読むことの課題に取り組む中で理解方略を教え、使えるようにしていく必要があることを確認した。また、学習者のほんものを読むことの学習を支え、その中で理解を深化させることができるようにしていくうえで、教師の見とりとフィードバックがきわめて重要なものであることを確認した。

次に、米国のリテラシー研究者であるジェフリー・ウィルヘルムの一連の研究を手がかりとして、検討を行った。ウィルヘルムは、教師が「伝達モデル」にもとづく学習指導を展開していくのではなく、学習者とともに協働しながら学習指導を創造することが、学習者がほんものを読むことの学習に取り組むうえで重要な意味をもつと主張している。その際、ウィルヘルムが重視したのが、学習者の声にしっかりと耳を傾けること、対話を通じた形成的評価を機能させていくことであった。合わせて、ウィルヘルムは、10相からなる読者反応とともに、5種類の読むことで得られる喜びをまとめていた。検討を進めていくなかで、ここでウィルヘルムが提案した読者反応と喜びを関連づけて対話的評価を行うことが認知的な側面と社会情動的な側面も合わせた教育評価のひとつのモデルになるのではないかという見通しをもった。

さらに、この点に関連して、米国のリテラシー教育コンサルタントであるグラビティー・ゴールドバーグの所論の検討も行った。ゴールドバーグは、読むことの教育評価において認知的な側面のみを取り立てると、どうしても「できる/できない」という見方、さらには学習者たちの「欠点を探す見方」が優勢になることを問題視した。こうした状況に陥らないためにも、重要なのが近年米国で重視されている「長所にもとづく学習指導」という発想である。そうした発想をもとに自立した読者を育成するうえで重要になるのが、学習者が読むなかで行っていることしっかりと看破し価値づけるということである。これはゴールドバーグの言葉を借りると称賛する

見方 にもとづく教育評価を実践していくことである。

こうした検討を踏まえ、うえて、「読むこと」の学習指導のなかで対話的評価を実現するための要件を探るため、米国のリテラシーコンサルタントであるケイト・ロバーツ、ならびにジェニファー・スコグginとハンナ・シュネーウィンドの所論を検討した。これらの検討を通して、対話的評価は、学習指導の改善のための評価であることを改めて確認した。それとともに、そうした対話的評価は、教師と学習者双方が十分な参加を果たした評価実践の場で実現されるものであるとの知見を得た。これは、スコグginとシュネーウィンドの言葉を借りれば「信頼」を核とした教育評価実践であるということになる。そこで、教師は読むこと、あるいは学習者一人一人についての専門家であるという認識のもと、学習者と真摯にかかわることが求められる。そうすることで、教師と学習者の間には「信頼」関係が生まれる。またそうした「信頼」関係が生まれ強くなっていくことで、自立した読者へ成長していくことをめざす教室文化が生まれるのである。ここでの検討から、読むことの教育において、教師と学習者が協働しながら、「学習のための評価」や「学習としての評価」が十分に機能するような場の創造が実践的な課題であるということが明らかになった。

ここまでの検討を踏まえ、読むことの授業実践データの分析を進めた。この分析作業を通して、教師と学習者が協働して、学習者の成長物語を紡ぎ出していく様相を確認することができた。

またそれらは教師が学習者が行った読書行為を見とるだけでなく、その理由も含めて「称賛する見方」を働かせて教育評価実践を進めていること、そうした対話的評価を実践するうえでは、教師と学習者、学習者同士の「信頼」を核にあることを確認した。さらに、こうした対話的評価を継続的に実践することにより、学習者のうちに読む力を培かうのみならず、読者としての自覚や自尊感情が育まれていくこと、すなわち自立した読者の育成に資するということが実践的に確認できた。そして、これらをもとに、自立した読者の育成をめざすうえで、学習者が主体的に言葉に向き合い理解を深化させていくのを支える教育評価のモデル化を図った。

以上のことを踏まえ、本研究では、以下の4つのことを明らかにすることができた。

- (1) 学習者の理解の深化に資するものとするために、理解するための方法と、それを用いることで得た成果や「喜び」を関連づけて対話する学習評価が効果的であること。
- (2) そうした学習評価は、学習者の欠点を探したり、競争を煽ったりするのではなく、「称賛的な見方」を基盤としたものであること。
- (3) また、そうした学習評価は、教師と学習者、学習者同士が互いのことを信頼し合うなかで営まれるものであり、「信頼」を核としたものであること。
- (4) こうした学習評価を大切に継続的に行っていくことにより、学習者が教師に導かれたり仲間と一緒にさまざまな理解方略を試行錯誤したりしながら、読むことの喜びを得ることを大切にす文化が生まれ、学習者は自立した学習者へと成長していくことにつながる。

(主要参考引用文献)

- 足立幸子(2015)「読解力の非認知的要素を質問紙で評価する」、『教育科学国語教育』第786号, pp.112-115
- エリン・オリバー・キーン, 山元隆春・吉田新一郎訳(2014)『理解するってどういうこと?』新曜社.
- 勝見健史(2020)「『鑑識眼』による国語科単元学習の動的な評価」『月刊国語教育研究』第582号, pp.42-49
- 藤井知弘(2019)「『自立した読者』に関する実践からの考察」『岩手大学教育学部研究年報』第78号, pp.39-50
- 山元隆春(2014)『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』, 溪水社
- 山元隆春(2020)「読書教育」, 山元隆春・難波博孝・山元悦子・千々岩弘一『あたらしい国語科教育学の基礎』, 溪水社, pp.181-226
- Afflerbach, P.(2022)*Teaching Readers*, Guilford.
- Afflerbach, P. & Cho, B.(2011)*The Classroom Assessment of Reading*, Kamil, M.L., Pearson, P.D., Moje, B.L., Afflerbach, P.(Eds)*Handbook of Reading Research Vol.4*, pp487-514 .
- Fountas, I.C. & Pinnell, G.S. (2016) *The Fountas & Pinnell Literacy Continuum*, Heinemann.
- Keene, E.O.(2012)*Talk about Understanding*, Heinemann.
- Goldberg, G.(2016)*Mindsets & Moves*, Corwin.
- Pryle, M. (2018) *Reading with Presence*, Heinemann.
- Roberts, K.(2018)*A Novel Approach*, Heinemann.
- Scoggin, J. & Schneewind, H.(2021)*Trusting Readers*, Heinemann.
- Serravallo, J. (2015) *The Reading Strategies Books*, Heinemann.
- Serravallo, J.(2019) *A Teacher's Guide to Reading Conferences*, Heinemann.
- Wilhelm, J.D.(2016) "You Gotta BE the Book" (Third Edition), Teachers Collage Press.
- Wilhelm, J.D. & Smith, M.W.(2014)*Reading Unbound*, Scholastic.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 98
2. 論文標題 学習者の理解の深化をうながす読むことの形成的評価：フィードバックの効果的な活用に関する検討を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 琉球大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 195 209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 18
2. 論文標題 自立した読者 の育成に資する読むことので育的評価： 称賛する見方 を核とした形成的評価に関する検討を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 1 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 1245
2. 論文標題 国語科における「学び続ける主体」の育成に資する 学習のための評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 14 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 866
2. 論文標題 「学び続ける子供」を育てるための国語の評価とは	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 58 61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬 裕人	4. 巻 100
2. 論文標題 学習者中心の教育における読むことの学習評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus	6. 最初と最後の頁 111 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24564/0002017885	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 2
2. 論文標題 日々の授業に生きる国語科の学習評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本国語教育学会沖縄支部紀要 ていんがーら	6. 最初と最後の頁 11 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬 裕人	4. 巻 102
2. 論文標題 信頼 を核とした読むことの学習評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 琉球大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 99 115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24564/0002019697	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 自立した読者を育てるための学習評価 : Peter Afflerbach(2022)Teaching Readersを手がかりとして
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第142回東京大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 自立した読者の育成をめざす国語科の学習評価
3. 学会等名 沖縄小学校国語研究会春季学習会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 どのような学習評価が読むことの学びを促すのか - Kate Roberts(2018)A Novel Approachを手がかりとして
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第140回春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 日々の授業に生きる評価を考える - 教育評価の動向から
3. 学会等名 日本国語教育学会沖縄支部令和3年度第1回学習会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 信頼を核とした読むことの学習評価 - Jennifer Scoggin & Hannah Schneewind(2021)Trusting Readersを手がかりとして -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第141回世田谷大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新垣真、高瀬裕人
2. 発表標題 みんなで評価について考えよう - 中学校2年の意見文の授業をモデルに
3. 学会等名 日本国語教育学会沖縄支部令和3年度第4回学習会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 自己評価力の育成に資する「読むこと」の教育評価実践に関する検討
3. 学会等名 日本教科教育学会第46回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 中高生の読むことへの取り組みを促す教育評価に関する検討: Jeffrey D. Wilhelm(2016) "You Gotta BE the Book"(Third Edition)を手がかりとして
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第139回秋期大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------